クローズアップ CLOSE UP
話題の人に迫る

小奴可剣友会が全日本少年武道錬成大会で準優勝

日本武道館で8月2日に行われた平成18年度全日本少年武道錬成大会に、広島県代表として出場した東城の小奴可剣友会が銃剣道・団体の部で準優勝に輝きました。

団体小学生の部に各県を勝ち抜いた16チームが出場、また、団体中学生の部には17チームが出場しました。他の団体チームが男子で編成する中、小奴可剣友会は中学校2年生の立川翔太くんを除き、全て女子。体格や体力に勝る全国の強豪に挑みました。

「田舎の子どもたちなので、武道館の大きさや人の多さに圧倒され、精神的な弱さがでなければ」と、子どもたちを指導する井澤継男さんは心配。試合前「大舞台で自分を試すチャンス。勝負ごとも大事だが悔いのない試合をしてがんばれ」と激励しました。

試合は1チーム3人で、3分間の3本勝負。子どもたちは、頭の中が真っ白になるほどの緊張の中、積極的に責めて1回戦を勝ち上がりました。

2回戦からは緊張がほぐれ、伸び伸びとした剣がでました。また、相手に取られたら、すぐに取り返す勝負強さが目立ちました。「勝ちたい！」という気持ちが1つになり、3人が互いにアドバイスを送るなど、チームワークの良さで、一戦一戦大事に勝ち上がり、上位に進出しました。

団体小学生は、決勝まで全て3―0で順調に勝ち上がり、決勝は神奈川県代表の本間道場と対戦し、惜しくも1―2で敗れたものの、堂々の準優勝。出場した3人は「思ってもみなかった成績で、うれしかった。だけど、決勝で負けた時は悔しかった」と喜びの中に悔しさも味わいました。

団体中学生は、大将の立川翔太くんを中心にまとまり、昨年の3位を越える準優勝。名越光希さんと田邊芳佳さんは「相手は男子で、大きな体格で恐さもあったが、気持ちで負けないように攻めたことがよかった」と大会を振り返りました。

また、個人戦でも立川翔太くんと長谷葉月さんが初優勝を飾るなど、上位成績を収めました。

過去最高の成績に、井澤継男さんは「小奴可剣友会の良さは、言ったことを素直に受け入れて取り組むことができること。試合でも基本動作に忠実に素直な剣を出していた。来年は相手をかく乱する動きを磨き、ぜひ優勝したい」と新たな目標を定めました。

成　績

■団体中学生の部　準優勝
名越光希、田邊芳佳、立川翔太
■団体小学生の部　準優勝
長谷葉月、中原裕佳、立川　茜
■個人中学2年生男子の部
優勝　**立川翔太**
個人小学5・6年生女子の部
優勝　**長谷葉月**、敢闘賞　**田邊円香**

指導者
井澤継男さん（東城町千鳥）

発足から25年間にわたり、情熱と愛情を持って子どもたちを指導。「子どもたちが一所懸命練習に取り組んでいる姿を見ると感動し、涙があふれる時もありますが、武道を通じて、心と体を鍛え、強くたくましく、勇気と正義感をもった子どもたちを育成し、将来社会に役に立つ人になってもらいたい」と望む。

■広島県銃剣道連盟理事長。
■銃剣道教士八段、短剣道教士八段、
■剣道五段、居合道五段。
■銃剣道A級審判員。
■公認スポーツ指導員。

個人中学2年生男子の部優勝
立川翔太くん（小奴可中学校2年）

「3年連続負けつづけた北海道の村上浩隆くんに勝つことだけを考えていた」。最大のライバルに3回戦で対戦し1－0で勝利、その勢いで初優勝した。剣友会のリーダー的存在で、下級生の手本となっている。「きれいに突きが入った時は、最高の気分。来年も優勝し2連覇を達成したい」と話す。

個人小学5・6年生女子の部優勝
長谷葉月さん
（小奴可小学校6年）

「優勝した瞬間は、うれしくて最高の気分だった。周りのみんなのおかげ」とにっこり。小学校の最高学年として、チームを引っ張った。

銃剣道

銃剣道とは、槍術に似た近代武道のことで、銃の先端に銃剣をつけ、接近戦で戦えるようにしたことから銃剣道という。現在では、国民体育大会の正式種目に指定され、また主に自衛官を中心に各地で学生・社会人の部を含めた大会が行われている発展中の武道スポーツ。

競技は10メートル四方の仕切りの中で、相手の有効部位（胴・小手・ノド）を、木銃と呼ばれる木製の長い銃をかたどった剣で突き、審判が有効突きかどうかを判断し勝敗が決まる。

小奴可剣友会

小奴可剣友会は、昭和57年5月に発足。文武両道をモットーに、小学生から高校生まで17人のメンバーが週2回の練習を行い、各種大会に参加している。